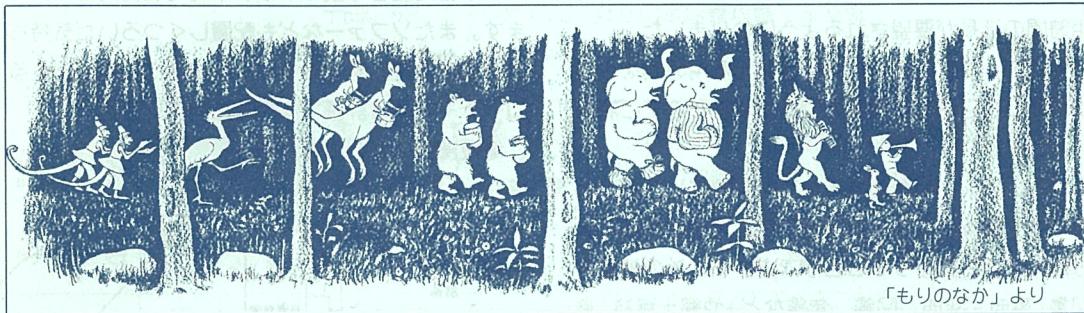


図書館たより

号数 第55号
 発行日 昭和57年3月30日
 編集行 島根県立図書館
 松江市内中原町52
 TEL(0852)22-5725
 印刷 渡部印刷株式会社



「もりのなか」より

昭和60年代に備えて

島根県立図書館長 林 晓二

今、県立図書館ではコンピューターに取り組もうとしている。と言っても、まだコンピューターを導入したわけではない。導入のための準備をすすめている段階である。なぜ、コンピューターなのか？

それは、この4～5年来、県内の読書に関する状況が少しずつ変ってきている。最近、町村長さんや町村の教育長さん方とお話をすると、図書館活動や読書振興についての姿勢が、以前と違って、かなり積極的になってきたことが感じられる。その具体的な現われとして、例えば、過去2カ年間に町立図書館が5館誕生したこと。市町村で独自の自主的な読書普及事業がすすめられてきたこと。具体的には、自動車巡回の町村が8市町ふえ、配本所活動の町村も大幅にふえてきたこと。また、県立図書館とタイアップして親子読書活動を行なう町村が、全町村の80%近くになったこと等々である。遅ればせながら、本県でも読書振興の気運が高まってきている。喜ばしい限りである。

54～60年度までの読書振興計画を樹てて、その推進に努めている県立図書館としては、ようやく芽吹き始めた、この動きを更に拡げ、深めて行かねばならない。図書館のない町村を無くし、先進地域みなみの活発な図書館活動が拡がる時期も、そう遠くないものと期待している。

今、県立図書館が検討をすすめているのは、その段階——県内全町村に図書館が整備され、読書活動

が活発となり、県民の読書意欲が県内にみなぎる時期——での県立図書館の役割であり、それに対応できる諸機能の充実整備の問題である。その一つが、最初に述べたコンピューターの問題である。市町村の図書館からあるいは、県民から直接、本や本のもの情報について質問、相談、調査等（図書館用語というレファレンス）に対応するため、本や本に含まれている情報の検索にコンピューターを活用しようとするものである。現在でも30万冊に近い図書と、それに包蔵されている情報を迅速、適確に提供するのは、仲々大変である。図書も情報も幾何級数的にふえて行く状況からすれば、早晚ベテラン司書でも処理し切れなくなる。コンピューターの記憶力と検索能力を借りねばならない時が迫っている。コンピューターには、県立図書館の情報だけでなく、県立図書館にない図書についても、国会図書館や他の公共図書館、大学図書館と連携して、それらの情報を蓄える計画である。

こうしたことは、一朝一夕にできるものではない。3年前から少しずつ調査し、研究してきたが、いよいよ、57年度から具体的なスケジュールですすめることにした。導入するのは昭和60年度を目標にしているが、各種の問い合わせに充分応えられる程の情報量が蓄積できるのは、65年頃であろうか。

県内の読書普及が、現在の予想をこえて拡がり、県立図書館の態勢が充分に整わぬいうちから、県内の各図書館や各地域の人々から多くのレファレンスが殺到して、てんてこ舞をするようになれば、嬉しいことである。

島根県立図書館

新年度事業の概要

(館内奉仕)

■利用時間の延長

県立図書館の利用時間は、従来9時から17時までとしていましたが、近年図書館利用の増大に伴い利用時間の延長が要望されるようになりました。

そこで、これに応え4月1日から利用時間を1時間延長し、9時から18時までとしましたのでご利用ください。

館内には、幼児から大人までを対象にした約6万冊の本を開架し、自由に閲覧でき、希望の本は1人3冊まで15日間借りることができます。その外参考図書(事典、辞典、図鑑、年鑑など)や郷土資料(島根県についてのあらゆる資料)があり、調査・研究もできます。また新聞や雑誌などもありますので大いにご活用ください。

■ファミリーコーナーの新設

書庫の増築に伴い今年中に資料室が増設されますが、新資料室には“ファミリーコーナー”を新設し

現代日本文学作品(主として小説)、推理小説文庫、家事、スポーツ、趣味、園芸、一般美術全集、および中学生向図書等読みやすい本約5,000冊を開架します。またソファーなども配置しくつろいだ気持ちで読書ができる雰囲気を作り、皆さんに親しまれるコーナーにする計画ですのでご期待ください。

増設部分は次のとおりです。



(館外奉仕)

■モデル市町村事業

子どもの中有る、よいものに手を伸ばそうとする力と、良い本の中にある子どもたちに訴えかける力を信じ、親子読書はモデル市町村を中心として、今や全県下に普及しつつある。石の上にも3年といわれるが、この事業も3年を経て、いよいよ石に穴があきだす時を迎えた。57年度は、新しい指定市町村はないだけに3年の成果をみつめなおし、じっくりと深める活動を計画している。そして、60年をめどとする第3期への飛躍を期すのである。

■図書センター事業

この事業の目的である公立図書館への移行は既に5館(日原、仁摩、石見、佐田、瑞穂)の町立図書館が誕生することにより成果をあげており、今年度も更に温泉津町に新設し、更新センターを含め11図書センターの援助、指導をおこなう。

総援助図書冊数 —— 25,000冊

公立図書館設立準備指導 —— 57年度、58年度に終了する36図書センターに対しておこなう。

■移動図書館事業

読書普及活動の重要な力となる図書資料を、図書館、図書センター未設置町村に定期的に配本するもので対象町村は14町村であり、年5回(隠岐地区4回)各町村の中心となる読書施設に巡回し配本すると共に、一般個人貸出も実施する。また前年度から開始した6県立特殊学校巡回は、非常に好評のため本年度も引き続きおこなう。

巡回対象町村 —— 加茂町、掛合町、吉田村、仁多町、羽須美村、大和村、邑智町、川本町、湖陵町、金城町、柿木村、西ノ島町、海士町、知夫村)

巡回対象学校 —— 松江ろう学校、松江清心養護学校、松江緑が丘養護学校、江津清和養護学校、浜田ろう学校、身体障害者授産センター

ふるってご参加ください!!

昭和57年度 県立図書館各種講座

申込方法 「住所・氏名・電話番号・受講講座名」をハガキか電話で下記へ
お申し込みください。

〒690 松江市内中原町52 県立図書館管理課 普及係

☎0852-22-5730

事業名	出雲国風土記 を読む会	古文書を読む会		万葉集を 読む会	親子で絵本を 読む会	図書館読書 教室
		入門講座	上級講座			
開催日	毎月 第2金曜	毎月 第1土曜	毎月 第3土曜	毎月 第2木曜	毎週水曜	毎月 第2火曜
時間	13:00 15:00	13:30 15:30	13:30 15:30	14:00 16:00	15:00 16:00	13:00 15:00
会場	島根県立図書館					
募集人員	40名	30名	30名	30名	30名	30名
対象	一般					
内容	わが国でた だ一つの完本 としてのこっ ている「出雲 国風土記」を 講読しながら 古代出雲の実 相をは握し、 郷土のもつ深 い歴史性を理 解する講座で す。	県立図書館 が編集した 「古文書ハン ドブック」そ の他のテキス トを使用しま す。 初歩から手 ほどきし、読 解力の養成に つとめる講座 です。	入門講座を 終えた程度の 読解力をもつ 人が対象にな ります。 史料の背景を なす郷土の歴 史に及ぶ講座 です。	現存最古の 歌集「万葉集」 の講読と鑑賞 を行います。 原文の解説 にとりくみつ つ古代文化の 精髓にふれる 高度な講座で す。	親と子を対 象に絵本の読 み聞かせ、スト ーリーテリング、 本の紹介等を行 い、親と子の共通 の楽しみを見出 すと共に読書 への導入をは かります。	読書に親し みながら人生 に社会にある いは文化に対 する見方、考 え方を養う目 的から誰でも 気軽に参加で きる講座です。 参加者はグ ループを作っ て、集団読書 のかたちで和 やかに意見の 交換体験の交 流をはかりま す。
講師	県立図書館 資料課長 藤岡大拙	郷土史家 桜木保	県立図書館 資料課長 藤岡大拙	元広島女学院 大学教授 宍道達	県立図書館 こどもチーム	
テキスト代を除き無料						

第1期読書普及モデル市町村事業終了にあたって

第1期読書普及モデル市町村(54~56年度)の木次町、仁摩町は本年度で3ヶ年の事業期間が終了した。今後は自立的活動へ移行し親子読書を中心とする町ぐるみの普及活動を更に深化する計画である。

■仁摩町

「昭和54年度、県立図書館から読書普及モデル町として指定を受けたことは、本町にとって思わぬ恵まれた機会であった。家庭教育学習の視点を親子読書におき、仁万保育所を拠点として進めることにした。」とは、昭和54年度親子読書記録(冊子)の巻頭言である。

昭和54年以来三年間、県立図書館の配本援助を受けながら、図書の充実と地区出張文庫の設置など、読書の普及、貸出の拡大を図る中で、昭和54年度仁万保育所、第二年次からは町内の全保育所を対象にこの活動を展開したが、55年度は宅野保育所、56年度は大国保育所をそれぞれの年度の重点地区として、県立図書館の先生方のご指導と保育所職員のご協力を頂き、保育所母の会の皆様のご理解を得て親子読書を推進して現在に至っている。

親子読書学級に出席すると、母親の誰かが必ず発表される親子読書実践の嬉しい体験を聞きながら「親と子の温かいふれあい」を眼のあたりに見るような感激を覚え、今後指定期間終了如何にかかわらず、折角の親子読書事業を更に精力的に進めたいと、覚悟を新たにしているところである。

昭和57年度は引き続き家庭教育学級として、馬路保育所を重点的に指向しながら、各保育所ともに親子読書普及を計画中である。

県立図書館の先生方や大田市の芝尾悦子先生、当町の泉さつき先生の平素のご指導に衷心よりお礼を申し上げると共に今後格別のご協力を賜るようお願いする次第である。

文責 仁摩町教育長

門 崎 清

■木次町

モデル市町村事業を終えて心に強く思い浮ぶものは、その中の核的活動である親子読書活動のあゆみである。町内幼稚園共同編集になる親子読書感想文集に次のような一節があった。“長女が私の不注意で事故に会い、「今日で、この幼ない命は」と医者から言われたとき、「お母ちゃん、幼稚園から借りた本を読んで」と長女は開かぬ目を少しあけるようにして催促した。声にはならぬ声で、やっと読んでやった本『いっすんぽうし』。もし、あのとき親子読書がなかったら、あの半日をどうして……。たぶん家族みんな泣き続けたにすぎなかつたでしょう。(略)その長女も今では元気に小学校へ”この一文に触れたとき思わずほろりとした。そして親子読書活動にとりくんでよかったと、つくづく思ったのである。

最近行われた某地方紙主催の読書感想文コンクール感想画部門で四幼稚園から入選者を出し学園賞受賞園も出たことは親子読書活動の成果を示す象徴的な出来事であったと思ったのである。三年前モデル市町村の指定を受けたとき、まず取組んだ事業は町内全幼稚園職員の研修会であった。そして保護者のオリエンテーション、活動の実践へと事業を進めていった。それは町内全幼稚園児と小学校1年児童全員439名を対象とした活動であった。第二年次は小学校2年生が加わり三年次には保育所も参加して約570名の子供たちが取組む活動になった。活動を通して「継続は力なり」ということを理解した今教育委員会・小学校・幼稚園・保育所・図書館が連携し協力して、この活動体制の維持存続をはかる考えである。「このふれあいが未来をひらく」というにびき国体のスローガンは親子読書のスローガンでもあると訴えてきた。一冊の絵本を媒介としての親子の心のふれあいが子供たちの未来を開くものであることを信じて、今後、親子読書活動の存続と定着をはかっていく方針である。

文責 木次町立図書館主任

塔 間 武

図書館のない、人口3万人余の平田市が、図書館建設をめざして始めた読書普及活動が「ママさん巡回文庫」です。その目的は、①気軽に読める巡回文庫 ②地域性を考慮した巡回文庫 ③コミュニティーとしての巡回文庫 ④余暇利用の巡回文庫 です。

「ママさん巡回文庫」は、巡回車「ひまわり号」で文庫を置かせていただいている各家々を巡回していく活動です。ひまわり号が立ち寄るのは一般的家庭の玄関先です。そこにカラーBOXを用意し、図書を50冊ずつ置いて、小さな地域の文庫となっています。文庫のある家の近所の人たちは、図書館まで行かなくても図書を利用することができます。私たち市の職員は、毎月1回その文庫を訪れて、中の50冊の本を新しい50冊に入れ替えると同時に、文庫の利用状況について調べたり、文庫の管理をさせていただいている家の人と話したり、図書に対する要望をきいたりします。

この活動がスタートしたのは去年の5月1日です。現在、文庫は56カ所に設置されており、ひまわり号は月4日の日程で全文庫を巡回し、図書を入れ替えています。巡回先は、西地合の端の方から猪目分校の先までほぼ全地域にわたっていますが、「ポンとの数ほど図書館を！」というスローガンにはまだまだです。

一般の家庭に本をもっていったのですから、配本した私たちも、その仕事を受けて下さったお母さん方もおっかなびっくりで始めた活動でした。「本を借りに来られるかしら」「なくなったりしないかしら」不安と期待が入り混った気持ちでとにかく始ましたのでした。文庫の図書の目録を作って、地区内で回覧してもらうことにしました。熱心な家庭の方は、親しい人や隣近所の人に電話をかけたり本をもっていったりして宣伝して下さいました。そ



して何よりもまず、文庫を置かせていただいている家の人利用していただくことにしました。

市内56カ所、どこへ行っても読書好きな方が1人や2人はいらっしゃって、さっそく文庫の本を利用してもらいました。秋頃からは地域のお母さん方の強い要望により、子供向きの図書も配本することにしました（当初は成人向きばかりでした）が、子供の本はもっていったものが全部読まれるところもありました。この1年間で約5千冊の利用があり、去年までは図書室でねむっていた本のことを思うと、誠に画期的なことです。家で寝たっきりだったおばあさん、船で漁に出かけるおじさんなど、図書館まではとても行けないけれどおっしゃる方々に、喜んでいただきました。そして地域の子供たちにも。

しかし、利用率は20%とやや低調で、文庫の利用者はまだまだわずかです。自分の家の近くに便利な文庫があることを知らない人もまだ大勢います。私たちはこの1年間は布石の年だったと考えています。配本する50冊をいかにして利用者の読書欲を満たせる編成にするか、人々を文庫にひきつける内容にできるか、また、一般の家庭にどうやったらもっと気軽に立ち寄ってもらえるようになるかなどの問題点を一つ一つ皆で考えてのり越えていきたいと思っています。文庫を置かせて下さっている家の方々を中心に、私たちの手でぜひ図書館にまで結びつけたいものだと考えています。

なお、「ママさん巡回文庫」の他に、市民会館の図書室を改装し、室内を明るくしたり、夏期夜間開放（9時まで）をしたり、平田の歴史を知る講座を開いたり、市民の蔵書を寄贈してもらう活動を開催したりして、読書環境を整えつつあるところです。

市町村のユニークな活動から —平田市・ママさん巡回文庫—



私と本の結びつき

出雲市中野町 和田 恵子

私が、"本を読む"ということに興味を覚えだしたのは、小学校に入学して間もない頃、伯父から1冊の本をプレゼントされた時から始まった。その本の題名はたしか、「グリム童話集」だったと思う。その頃はまだ、本を読む楽しさよりも、表紙やページに描かれているさし絵が大好きで、次々と母に、本をねだったものだった。

父も母もそれぞれに仕事をもち、いつも鍵っ子だった私は、学校から帰るとすぐに宿題を済ませ、貰ってもらったばかりの本に熱中していた。それ以来、本で寂しさを紛らわすことを知り、本を友達にしているような子供になった。だから、どんなに厚い本でも、たいてい1日で読み終えるということが、しばしばあり、両親を驚かせたりもした。

その頃、本を読むこと以外に、私は他に、いかにも子供らしい夢のある、ある事を考え出した。そのある事というのは、本を1冊読み終えるごとに、本の中の主人公に手紙を書くという事だった。もちろん、本の中の登場人物は、物語の上の作られた架空の人物であるが、私はオルコットの書いた、あの「あしながおじさん」にでも手紙を書くような気分になり、1冊読み終えると、たどたどしい字で、えんぴつを走らせ、3枚くらいの便箋に長々と手紙を書くようになった。そして、宛名を書いて封筒に入れ、箱で作ったポストの中に入れておくのだった。すると、翌日の朝起きてみると必ず手紙の返事がそのポストの中に入っているのだった。子供心に「あしながおじさん」に手紙を書く気分でいたとはいえ、本当に返事が来るなどという常識はずれな考えはもつていなかったので、返事を書いてくれた人が母であるということがすぐにわかった。私は嬉しくて嬉しくて、それからますます本に熱中し、せっせと手紙を書いた。けれど私は、母の前ではわざと、「今日も返事が来たよ、これからも来るかなあ。」などと言つ

たりして、母の顔色を窺って喜んでいた。でも、お互いに誰が書いたかということに触れずにいたので、手紙の交換はその後、3年間続いた。私が寂しい思いをしないようにと、母が気遣ってくれたおかげで、私はどれだけ勇気づけられたことか。またいっそう本との結びつきが強くなったことに深く感謝している。そのおかげで18才になった今でも、空想好きで、本の虫から抜け出せないでいるが、困難な事にぶつかったり、自分が苦しい立場に置かれたりすると、決まって本が読みたくなる。そして、自然に自分の気持ちになんらかの決断を下してくれるような気がする。

最近の若者は、本を読むより"おしゃれ"とか"遊び"に強い関心を抱く傾向の人達が多いけれども、表面的なことに心を奪われがちで、なにか虚しい思いがする。

本を読むことは、必ずしも難しいことではないし、一度に読もうとせず、少しづつ読んでいけば、意外と楽しいものに感じられるかもしれない。一生涯を通して世界のすべての本を読むことは出来ないにしても、古くから今日に至るまでの、世界の偉人たちが書いた書物が、こんなに手軽に、しかも安い価格で手に入るということ事態、人間にしか与えられないすばらしい特権だと思う。

本を読むことには、階級とか差別は全くない。本の前では誰もが平等であり、読者なのだ。だからこそ人々に親しまれ読み継がれているのではないか、私はそう思う。

どんな時代になっても、決して本だけは、手放したくない気がする。

私にとって本こそ"生命"なのだから……。

あとがき

昨秋、「読書週間」にちなんで、「わが家の親子読書実践記録」を募集しましたところ、多数のご応募をいただき、厚くお礼を申し上げます。

優劣をつけがたいほど立派な作品が多く、そのうち一編を掲載させていただきました。他の入選作品は「読進協」機関紙に掲載させていただきました。

新刊案内

—昭和56年度 新着読書会用図書—

読書会用図書の利用をどうぞ

集団で読書することで仲間関係の和を深め、話しあうことで他の本の情報交換にもなります。

当館では同一図書10~15冊を1セットにして、読書グループの活動にテキストとして2ヶ月以内を期限に貸出しを行っています。内容は児童書、教養書、文学書にわたり267セットを整備しています。

下記の図書は、昭和56年度に購入したセットです。各職場、サークル等で読書会をはじめてみませんか。

お問い合わせは 島根県立図書館 管理課普及係 TEL 0852-22-5730

幼児・低学年用

書名	著者名	出版社	冊数
いえでぼうや	灰谷 健次郎	理論社	15冊
エルマーのぼうけん	R·S·ガネット	福音館書店	15冊
ダンプえんちょうやっつけた	古田 足日	童心社	15冊
ちいさいモモちゃん	松谷 みよ子	講談社	15冊
なぞなぞのすきな女の子	松岡 享子	学習研究社	15冊
もりたろうさんのじどうしゃ	大石 真	ポプラ社	15冊
どろぼうがっこ	加古 里子	偕成社	15冊
たんたのたんけん	中川 李枝子	学習研究社	15冊

一般・教養書

危機をのりきる中年学	水野 肇	主婦の友社	15冊
巣鴨プリズン13号鉄扉	上坂 冬子	新潮社	15冊
わたしの出会った子どもたち	灰谷 健次郎	新潮社	15冊
ふたつの文化の間で	広中 和歌子	文化出版局	15冊
父 母 の 曆	小泉 夕工	講談社	15冊

一般・文学書

父と子(上・下)	水上 勉	朝日新聞社	15冊
渡る世間に鬼千匹	橋田 寿賀子	P·H·P	15冊
石川節子	澤地 久枝	講談社	15冊
旅路	藤原 てい	読売新聞社	15冊
冬祭り	秦恒平	講談社	15冊
玉の緒	芝木好子	河出書房新社	15冊
姥ざかり	田辺聖子	新潮社	15冊
石蕗の花	広津桃子	講談社	15冊
花かけの詩	出雲井晶	中央公論社	15冊
窓ぎわのトットちゃん	黒柳徹子	講談社	15冊
母一夜	水上 勉	新潮社	15冊
みちのくの人形たち	深沢七郎	中央公論社	15冊
細香日記	南條範夫	講談社	15冊
人間万事塞翁が丙干	青島幸男	新潮社	15冊

NEWS

●移動図書館連絡会議開催

昭和57年2月25日、県下14教育委員会の担当者が集まり、主に56年度の読書普及活動の事例発表に重点を置き、熱心に討議がなされた。なかでも図書センターへ移行する温泉津町と独自の巡回配本活動へ移行する隱岐島後教育委員会管内の4町村の姿勢が注目された。

●図書センター連絡会議開催

昭和57年2月27日、県下13センターから担当者が集まり、瑞穂町の公立図書館移行計画、56年度新設の桜江町、美都町の読書普及活動事例発表等を中心討議がなされ、休日の図書室開放実施センターが多くなる現状から、全センターで実施されるよう努力目標とすることを確認した。

●島根県公共図書館協議会、職員研修会開催

去る3月4・5日の2日間、県立図書館で職員研修会が開催された。これは協議会が図書館等読書施設の担当者を対象に毎年1回開催しているもので、

今回も昨年に引き続き多数(40名)の参加者があった。

今回は「読書普及活動を実践して」をテーマに、第1日は成人対象の活動、第2日は子どもを対象にした活動を7名の担当者から事例発表があり、これに基づいて研究討議を行った。また初の試みとして第1日の夕方から、むらくも会館で参加者による交流会を行い職員相互の親睦を深めた。

2日間を通じて充実した研修がなされ、今後の読書活動推進のため大きな収穫が得られた。

●「源氏物語を読む会」10年で全巻読破

昭和46年秋から月2回、当館で続けてきた「源氏物語を読む会」が、10年間で全巻読破し、この3月に終了した。会員は主婦が多く、常時20人余りが出席した。

講師の元広島女学院大学教授宍道達氏は、休講はただの1回だけという熱心さで師弟ともども「よく続いた」と感慨深げであった。

寄 贈 図 書

ご恵贈ありがとうございます

郷土石見の誇る人物 浜田市 山崎克彦
日和大元神楽台本 石見町 池田 浩
点字広報島根県だより2月号 松江市 ライトハウス・ライブラリー
学校文集 くすの木 第4号 美保関町 福浦小学校
学校文集 あゆみ 15号 加茂町 多賀輝雄
文集やつか 第31号 八雲村 八雲中学校
図書 16号 大社町 大社高等学校
石見潟 第7号 江津市 江津市文化財研究会
読書感想文 第33回 出雲市 出雲高等学校
読書感想文 1981 横田町 横田高等学校
かつら 第12号 松江市 内中原小学校
年刊 歌集 56年版 松江市 島根県短歌連盟
潮流詩派 松江市 山陰詩人クラブ
石見詩人 72 益田市 石見詩人社
美容と健康のための食生活のすすめ 松江市 島根食糧事務所
三刀屋(諏訪部)氏について 松江市 島根大学中世史研究会

近世講武村の山論について 松江市 島根大学古文書ゼミ
島根の体操50年 松江市 島根県体操協会
鮎の里 日原町 日原町役場
出雲文学 第11号 出雲市 出雲文学の会
文集やつか 八束郡 小学校国語研究部
ともしひ 松江市 中学校国語研究会
広報 たいしゃ 大社町 大社町役場
中電文芸 №27 松江市 中国電力松江営業所
大根島入江竹谷家文書 八束郡 岩田信太郎
松平直政公銅像記 松江市 奥原 秀夫
山陰のはにわ 松江市 八雲立つ風土記の丘
蛮 族 第8号 松江市 蛮族の会
山陰の女 12号 斐川町 岡 より子
歌集 橋脚 松江市 安部 洋子
安来高等学校八十年史 安来市 安来高等学校
潮 騒 91号 東出雲町 東出雲文学懇話会
山陰詩人 松江市 山陰詩人クラブ
下山佐の今昔 広瀬町 岩田 正臣
豊かで住みよい"マチ"づくり 松江市 内藤 正中
山陰の虫たち 松江市 近木 英哉
性を語る 松江市 古曾志恵洪